

英語力が幸福度に与える影響

-幸福度研究的アプローチ-

寺田好秀

2018.7.11

JCSS-TR-79

名古屋市立大学大学院経済学研究科
〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑 1
terada.economics.tennis@gmail.com
@Yoshihide TERADA, 2018

日本認知科学会
事務局
〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田 1-1-1
明治大学理工学部電気電子生命学科内
E-mail: jcoss@jcoss.gr.jp

英語力が幸福度に与える影響¹

-幸福度研究的アプローチ-

寺田 好秀*

要約: 本稿では、社会全体の人口動態を反映させた『慶應義塾家計パネル調査』を利用して、幸福度研究の観点から個人の幸福度に英語力が与える影響について分析をする。幸福度研究は、主観的幸福度と呼ばれる人々の主観的な生活の評価や幸福度を中心に研究する複合領域の分野にある。分析の結果、(1)男性は英語力が高くても幸福度が上がらない、一方で(2)女性は英語力が高いと幸福度が上がることが明らかになった。この相違は、男性は必要性から英語を習得している傾向にあるのに対し、女性は自主的に英語を学習し、習得した英語を好きなことに活かす傾向にあるからだと考察した。

Abstract: This study analyzed the influence of English ability on individual happiness by using data from the “Keio Household Panel Survey,” which reflects the demographics of society. In the analysis, subjective happiness was treated as a dependent variable; according to the ordered probit model, results revealed that (1) the level of happiness does not increase for men with a high level of English, whereas (2) the level of happiness does increase for women with a high level of English. The difference between the two sexes is that men tend to learn English as a necessity, while women are more likely to learn English through individual interests. Moreover, it can be argued that an individual’s voluntary acquisition of English ability increases his or her level of happiness.

キーワード: 英語力, 慶應義塾家計パネル調査、主観的幸福度、順序プロビット・モデル

Keywords : Keio Household Panel Survey, ordered probit, English ability, subjective happiness

¹藤田康範先生(慶應義塾大学)、山本陽子先生(名古屋市立大学)、慶應義塾大学大学院経済学研究科設置科目「経済政策論演習」の受講者からいただいたコメントは本研究を前進させるものであった。また、慶應義塾大学パネルデータ設計・解析センターより「日本家計パネル調査(JHPS/KHPS)」((旧)「慶應義塾家計パネル調査(KHPS)」)の個票データの提供を受けた。記して感謝する。尚、本稿は pre-publication を目的としている。

*名古屋市立大学大学院経済学研究科研究員

1. はじめに

2020年度より小学3年生からの英語必修化が完全実施され、企業では英語の社内公用語化が進み、英語力を習得する必要性は衰えるところを知らない。しかし、大半の人にとって人生の究極の目標は幸福になることといえるが、苦勞して身に付けた英語力は幸福度の獲得に貢献しているのだろうか。英語学習は辛いだけで、不幸の要因になっていないだろうか。

本稿では、社会全体の人口動態を反映させた『慶應義塾家計パネル調査』(以下、KHPS)を利用して、幸福度研究の視点から個人の幸福度に英語力が与える影響について分析をする。幸福度研究は、主観的幸福度と呼ばれる人々の主観的な生活の評価や幸福度を中心に研究する複合領域の分野にあり、哲学に始まり、医学、公衆衛生、心理学、社会学、経済学などの分野の研究者が取り組んでいる²。

本稿の構成は次の通りである。まず第2節で先行研究を確認し、第3節で推定モデル、KHPS、作成した変数の紹介をする。続いて、第4節で推定結果の提示と考察を行い、第5節でまとめを行う。

2. 先行研究

フライ(2012)や大竹・白石・筒井(2010)から、これまでの幸福度研究について確認する。幸福度の実証分析は心理学、社会学、政治学で研究が行われてきたが、経済学に心理学的研究が統合したのは最近のことである。リチャード・イースタリン(Easterlin(1974))の初期の研究は、多くの経済学者から注目されたが、当時は続くものがほとんどいなかった。同じことが、ティボール・シトフスキーの著作(Scitovsky(1976))についても言える。経済学者が自己申告による主観的幸福度の測定とその決定要因に一般的な興味を持ったのは、1993年にロンドンで行われたシンポジウムにおいてであり、その予稿集は後に *Economic Journal* 誌などに掲載された。経済学で様々な国と期間について幸福の決定要因に関する実証分析が盛んに発表されるようになったのは、1990年代後半以降のことで、日本においても、幸福度研究は2000年の少し前から細々と行われるようになったに過ぎない。そんな幸福度研究において、これまで幸福度の決定要因として分析されてきたものは、所得、所得格差、労働、性別や年齢などの個人属性、婚姻状況などの社会的属性、政治経済体制や国民性など数多くある。本研究はこの系譜上に位置し、英語力を検討した点に独自性がある。

3. 分析

3.1 モデル

² 内閣府社会総合研究所「幸福度研究について」

<http://www.esri.go.jp/jp/prj/current_research/shakai_shihyo/about/about.html>(2018年6月20日アクセス)

フライ(2012)によると、自己申告による主観的幸福度は、ミクロ計量経済学による「幸福関数： $W_i = \alpha + \beta X_i + \varepsilon_i$ 」というモデルを使用し、推定は順序プロビット・モデルか順序ロジット・モデルで行う。本稿では前者の順序プロビット・モデルを採用するが、詳しい説明は北村(2007)にある。

3.2 データ

利用する KHPS について慶應義塾大学パネルデータ設計・解析センターのウェブページ³を基に説明を行う。KHPS は 2004 年から調査を実施し、2007 年、2012 年に新規コホートを追加している。当初予定したサンプルサイズは、KHPS2004 は 4,000、KHPS2007 は 1,400、KHPS2012 は 1,000 である。調査対象は 20 歳～69 歳の男女で、層化 2 段無作為抽出法により選定している。抽出の第 1 段階では、全国を地方・都市階級により 24 層に層化し、各層に住民基本台帳人口の人口割合に合わせ標本数を配分し、そのうえで、1 つの調査地域あたりの標本数を 10 程度 (KHPS2007、KHPS2012 では 5 程度) として各層の調査地域数を決定し、所定数の調査区を無作為抽出している。調査地域は、抽出単位として国勢調査の調査区を使用している。第 2 段階では選定された調査地域の住民基本台帳を抽出台帳として、調査対象適格者を対象に、指定された起番号、抽出間隔に基づき 1 調査地域について約 10 人 (KHPS2007、KHPS2012 では 5 人) を抽出している。ただし、正規に選定された調査対象者が転居したり、長期不在、住所不明等で会えなかったり、調査を受けてもらえなかった場合、あらかじめ選定しておいた予備対象を代替として調査することにより、予定した標本サイズを確保している。予備対象は、正規の対象者と同じ調査区内に居住し、同じ性別 (男、女) と年齢区分 (20 歳代、30 歳代、40 歳代、50 歳代、60 歳以上) から無作為抽出している。このため、正規対象者であっても予備対象者であっても、性別・年齢区分でみた抽出率にバイアスは生じない。

本稿では、英語のレベルに関する設問がある KHPS2015 を利用する。ただし、対象者の学歴の情報は、KHPS2004、KHPS2007、KHPS2012 から紐付けしている。

3.3 変数

まず、「全く幸福度がない」を 0、「完全に幸福度を感じる」を 10 として、離散型の値を取る「幸福度」という変数を作成した。次に、対象者の英語のレベルが TOEIC600 点以上、英検 2 級以上に相当する場合 1 を取り、それ未満のレベルであれば 0 を取る「英語力」を作成した。また、未婚であれば 1 を取り、既婚であれば 0 を取る「未婚」と普段の健康状態が「よい」または「まあよい」であれば 1 を取り、それ以外ならば 0 を取る「健

³ 「日本家計パネル調査(JHPS/KHPS)」

< <https://www.pdrc.keio.ac.jp/paneldata/datasets/jhpskhps/> > (2018 年 6 月 20 日アクセス)

康」を作成した。さらに、20歳代を基準とする年齢に関する変数として、対象者の年齢が30歳以上かつ39歳以下であれば1を取り、それ以外であれば0を取る「30代」、40歳以上かつ49歳以下であれば1を取り、それ以外であれば0を取る「40代」、50歳以上かつ59歳以下であれば1を取り、それ以外であれば0を取る「50代」、60歳以上であれば1を取り、それ以外であれば0を取る「60歳以上」を作成した。そして、昨年の収入(万円)を値とする「所得」を作成し、中卒を基準とする学歴に関する変数として、最後に卒業した学校が高校であれば1を取り、それ以外であれば0を取る「高卒」、短期大学ないし高等専門学校であれば1を取り、それ以外であれば0を取る「短大・高専卒」、大学であれば1を取り、それ以外であれば0を取る「大学卒」、大学院であれば1を取り、それ以外であれば0を取る「大学院卒」を作成した。続いて、対象者が契約社員、アルバイト・パートタイマー、派遣社員、嘱託のいずれかであれば1を取り、それ以外であれば0を取る「非正規雇用者」、従業員規模500人以上の企業に勤めていれば1を取り、それ以外であれば0を取る「大企業」、官公庁に勤めていれば1を取り、それ以外であれば0を取る「官公庁」を作成した。最後に、関東地方を基準とする「北海道」、「東北」、「中部」、「近畿」、「中国」、「四国」、「九州」という地域ブロックと政令市(特別区を含む)を基準とする「その他の市」、「町村」という市郡規模の変数を作成した。

3.4 記述統計量

サンプル数は全体で1,959、男性が1,101、女性が858となった。記述統計量は表1,2,3として示している。

表1 記述統計量(全体)

	観測数	平均	標準偏差	最小値	最大値
幸福度	1,959	6.3160	1.9385	0	10
英語力	1,959	0.04900	0.2159	0	1
未婚	1,959	0.2318	0.4221	0	1
健康	1,959	0.4441	0.4970	0	1
30代	1,959	0.1700	0.3757	0	1
40代	1,959	0.2675	0.4428	0	1
50代	1,959	0.2813	0.4497	0	1
60歳以上	1,959	0.2476	0.4317	0	1
所得	1,959	365.9530	313.2046	0	3,000
高卒	1,959	0.4763	0.4996	0	1
短大・高専卒	1,959	0.1639	0.3702	0	1
大学卒	1,959	0.2853	0.4517	0	1
大学院卒	1,959	0.02093	0.1432	0	1
非正規雇用者	1,959	0.3190	0.4662	0	1
大企業	1,959	0.2266	0.4188	0	1
官公庁	1,959	0.05054	0.2191	0	1
北海道	1,959	0.04339	0.2038	0	1
東北	1,959	0.06738	0.2507	0	1
中部	1,959	0.1751	0.3801	0	1
近畿	1,959	0.1899	0.3923	0	1
中国	1,959	0.05258	0.2232	0	1
四国	1,959	0.02348	0.1515	0	1
九州	1,959	0.1057	0.3075	0	1
その他の市	1,959	0.60286	0.4894	0	1
町村	1,959	0.09239	0.2897	0	1

出所)KHPS 筆者作成

表 2 記述統計量(男性)

	観測数	平均	標準偏差	最小値	最大値
幸福度	1,101	6.2307	1.9220	0	10
英語力	1,101	0.05086	0.2198	0	1
未婚	1,101	0.1953	0.3966	0	1
健康	1,101	0.4423	0.4969	0	1
30代	1,101	0.1762	0.3812	0	1
40代	1,101	0.2507	0.4336	0	1
50代	1,101	0.2707	0.4445	0	1
60歳以上	1,101	0.2725	0.4454	0	1
所得	1,101	501.3915	321.9456	0	3,000
高卒	1,101	0.4641	0.4989	0	1
短大・高専卒	1,101	0.07448	0.2627	0	1
大学卒	1,101	0.3733	0.4839	0	1
大学院卒	1,101	0.03361	0.1803	0	1
非正規雇用者	1,101	0.1217	0.3271	0	1
大企業	1,101	0.2271	0.4191	0	1
官公庁	1,101	0.05268	0.2235	0	1
北海道	1,101	0.04269	0.2022	0	1
東北	1,101	0.07266	0.2597	0	1
中部	1,101	0.1744	0.3796	0	1
近畿	1,101	0.1898	0.3923	0	1
中国	1,101	0.06176	0.2408	0	1
四国	1,101	0.02180	0.1461	0	1
九州	1,101	0.1008	0.3012	0	1
その他の市	1,101	0.6076	0.4885	0	1
町村	1,101	0.08719	0.2822	0	1

出所)KHPS より筆者作成

表3 記述統計量(女性)

	観測数	平均	標準偏差	最小値	最大値
幸福度	858	6.4254	1.9551	0	10
英語力	858	0.04662	0.2109	0	1
未婚	858	0.2786	0.4485	0	1
健康	858	0.4464	0.4974	0	1
30代	858	0.1620	0.3687	0	1
40代	858	0.2890	0.4536	0	1
50代	858	0.2949	0.4563	0	1
60歳以上	858	0.2156	0.4115	0	1
所得	858	192.1562	193.0769	0	3,000
高卒	858	0.4918	0.5002	0	1
短大・高専卒	858	0.27855	0.4485	0	1
大学卒	858	0.1725	0.3780	0	1
大学院卒	858	0.004662	0.0682	0	1
非正規雇用者	858	0.5723	0.4950	0	1
大企業	858	0.2261	0.4186	0	1
官公庁	858	0.04779	0.2134	0	1
北海道	858	0.04429	0.2059	0	1
東北	858	0.06061	0.2387	0	1
中部	858	0.1760	0.3810	0	1
近畿	858	0.1900	0.3925	0	1
中国	858	0.04079	0.1979	0	1
四国	858	0.02564	0.1582	0	1
九州	858	0.1119	0.3154	0	1
その他の市	858	0.5967	0.4908	0	1
町村	858	0.09907	0.2989	0	1

出所)KHPS より筆者作成

4. 推定結果と考察

男性と女性に分け、「幸福度」を被説明変数、それ以外の変数を説明変数として順序プロビット・モデルによる推定を行った結果が表 4 である。まず、男性の「英語力」を確認すると有意ではないことが分かる。観測数は十分にあることから、英語力は幸福度に影響を与えないことが示唆される。次に、女性の「英語力」を確認すると係数が正の値を取り、5%水準で有意であることが分かる。このことから、女性は英語力が高いと幸福度が得られることが明らかになった。

高い英語力は男性の幸福度に影響を与えないにも関わらず、女性の幸福度に貢献する理由を考えたい。海外の外国語学習アプリ MosaLingua が外国語を学習する利用者にアンケート調査⁴を行ったところ、女性は外国語を「学ぶ楽しみのため」に学習する人の割合が多く(62%)、「旅行や楽しむため」と答えた人が 70%、自己啓発のためと答えた人が 77%だった。対する男性は「仕事で必要だから」と 44%が回答し、女性の 22%に比べて高かった。つまり、女性は自主的に英語を学習し、英語を学習していること、ないし習得した英語を好きなことに活かせることから幸福度を得ていると考えられる。一方で男性は、必要性から英語を習得しているため、英語を学ぶことから活用することからも幸福度を得られていないと考えられる。

⁴ “Are Women Better At Language Learning Than Men? Find Out the Answer!”

< <https://www.mosalingua.com/en/women-better-learning-languages-men/> > (2018 年 6 月 20 日アクセス)

表4 順序プロビット・モデルによる幸福関数の推定結果

	男性	女性
	係数	係数
英語力	0.0675	0.4034 (**)
未婚	-0.4294 (***)	-0.3217 (***)
健康	0.5781 (***)	0.6949 (***)
30代	0.3810 (*)	0.2261
40代	0.1472	0.2364
50代	0.2059	0.1818
60歳以上	0.3923 (*)	0.6001 (***)
所得	0.0001975	0.0005143 (**)
高卒	0.01440	0.2454
短大・高専卒	-0.06634	0.6441 (***)
大学卒	0.2847 (*)	0.5468 (***)
大学院卒	0.4233 (*)	0.7418
非正規雇用者	-0.02348	-0.1162
大企業	-0.01274	0.01633
官公庁	0.1185	0.2407
北海道	0.05183	-0.06317
東北	-0.05781	0.04690
中部	-0.01366	0.1755 (*)
近畿	-0.1037	0.03849
中国	-0.06755	-0.07979
四国	-0.5560 (**)	0.3858 (*)
九州	0.009756	-0.0154
その他の市	0.07758	0.03928
町村	-0.08981	0.2279 (*)
サンプルサイズ	1,101	858
疑似R ²	0.0410	0.0578

注)被説明変数は「幸福度」

出所)KHPS より筆者作成

5. まとめ

本稿では、分析データとして KHPS を、分析手法として順序プロビット・モデルを利用して英語力が幸福度に与える影響を分析した。その結果、(1)男性は英語力が高くても幸福度を得られないが、一方で(2)女性は英語力が高いと幸福度を得られることが明らかになった。この男女での相違は、男性は必要性から英語を習得している傾向にあるのに対し、女性は自主的に英語を学習し、習得した英語を好きなことに活かす傾向にあるからだと考察した。

今後の課題は、英語以外の言語、例えばフランス語や中国語などの活用能力と幸福度との関係を明らかにすることである。

参考文献

Easterlin, Richard. (1974) "Does Economic Growth Improve the Human Lot? Some Empirical Evidence," In *Nations and Households in Economic Growth: Essays in Honour of Moses Abramowitz*, ed. P.David and M.Reder. Academic Press.

Scitovsky, Tibor. (1976) *The Joyless Economy: An Inquiry into Human Satisfaction and Dissatisfaction*. Oxford University Press.

大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編(2010)『日本の幸福度-格差・労働・家族-』日本評論社.

北村行伸(2007)「順序選択モデル」『経済セミナー』Vol.626, pp.76-83.

フライ, ブルーノ S. (2012)『幸福度をはかる経済学』白石小百合訳, NTT 出版.